

# Sherwood Anderson の南部と黒人

## ——“The Man Who Became a Woman,” “The South,” “A Meeting South” の一評価——

小 林 祐 二

### I

南部と黒人についての Anderson の観察と思索、およびそれがいかに彼の作品にかかわったかを考察する場合、以下に述べるような、きわめて概括的な背景を考慮に入れておかななくてはなるまい。

今世紀初頭にパリに起こった黒人文化・芸術に対する関心の高まりは、やがて 1920 年代のアメリカ文学界にも新しい動向を生み出した。1925 年当時、例えば Eugene O'Neill の *The Emperor Jones* (1920) の上演での黒人俳優の活躍、*Survey Graphic* 誌が組んだ “new Negro” 特集、Countée Cullen のいくつかの詩が、白人の雑誌に掲載されたことなど、黒人の文芸の分野での活躍が目立ってきた。こうした文学界の新しい動向をとらえて、*New York Herald Tribune* 紙はそれを “The Negro Renaissance” と呼んだ。このような黒人の活躍は、白人の芸術家たちの黒人に対する関心の高まりと創作活動に刺激されて起きたといえる。科学の発達をもたらした機械主義・画一主義が社会生活のあらゆる分野を支配し、人間の自然性に根ざした本能や生命をも歪めていくという危機感を超克しようとする芸術家たちにとって、黒人たちの文化や生活には、白人の世界からはすでに失われてしまった自然を回復する活力が見出せると思えた。このような黒人文化に対する関心は、1920 年代のアメリカ文学に見られる原始主義 (primitivism) 志向の中のひとつの動向でもあった。

当時のこうした動きに刺激を与えたのは、つぎのような作家とその作品であった。まず Gertrude Stein の *Three Lives* (1909)、それから Vachel Lindsay の *The Congo: A Study of the Negro Race* (1915)、Carl Sandburg の “Nigger” (1916)、Eugene O'Neill の *The Emperor Jones* (1920)、Waldo Frank の *Holiday* (1923)、それと、1920 年代後半から 30 年代にかけて、この分野で特に大きな影響力をもったと評される Carl Van Vechten の *Nigger Heaven* (1926) などである。これらは、いずれも白人作家による作品であり、所詮は黒人についての観察者・共感者の作品としての域を出ないと批判される面は多かれ少なかれあったにしても、黒人の芸術上の自覚を促し、質の高い黒人文学を生み出すための刺激になったことは事実であった<sup>1</sup>。当時、黒人という立場を越えて創作しようとし、それ故に、黒人の状況や苦悩を描き出そうとする特性に欠けると批判されながらも、やはり黒人自身による作品の古典と評価される Jean Toomer の *Cane* (1923) が発表されたのも、上述のような文学的背景があつてのことであった。

その Toomer は二人の作家から特に強い影響を受けたといわれる。それは Waldo Frank と Sherwood Anderson からであった。前者からはその思想を、後者からは特に表現技巧、作品構成、人物設定の面で多くを学んだといわれる。Toomer が Anderson の作品、特に *Winesburg, Ohio* (1919) から新しい表現技巧の可能性を教えられたこと、また逆に Anderson が *Cane* から、これこそ真に黒人の作品だと感嘆するほどの感動を与えられたことは両者の書簡や発言から確かである。<sup>2</sup>

黒人の文化、芸術についての関心がこのように高まっていった 1920 年代に、Sherwood Anderson は、黒人文学の育成に影響を与えた白人芸術家たちの一人として、しばしば言及されてきた。しかし、これまで、彼自身はどのような黒人観をもち、また彼の作品の中にそれがどのように描かれているかという問題は、あまり検討されてこなかった。そこで、その問題に留意して作品を読んでみると、Anderson の黒人観は、彼が 1920 年前後から、生活の営みの場としての“home”と“community”をひたすら求めて、南部を放浪し続け、ついにはヴァージニア州のマリオン郊外に“Ripshin Farm”と称する居を構える軌跡と密接に関連していることがわかる。その事実はまた、彼の後期の作品や、彼が二種の地方新聞を自前で発行し続けた事実に見られるような、個人の生活とコミュニティとの関係の確かめようとしたこととも深く関わり合っているのである。この小論では、それらの点に焦点をあてながら、Anderson が南部と黒人の問題をどのように見たか、そしてそれが作品の中でどう描かれたかを考察していきたい。

## II

Anderson は、作家生活全体を通して機械文明が人間の自然な内発的生命力を抑圧し、それを規格化(standerdization)することの恐しさを強烈に感じ続けていたことは周知のことである。彼は、あるときはそれから逃避しようと企て、またでき得れば、それとの調和の方向を模索しようとし、またあるときはそれに抵抗する有効な方法を求めようとした<sup>3</sup>。彼の生涯も作品中の主人公たちも、そうした苦闘の軌跡であったといえる。そうした Anderson にとって、機械文明によって非人間化され、社会生活の中で連帯の絆を断ち切れ、疎外と孤独にさいなまれ、神経症に悩まされる白人に対して、黒人の生活の中には、自然な原始的な生命力が保持され続けているように見えた。

Anderson のこのような黒人観が最も直截に描かれていると一般に評されるのは、*Dark Laughter* (1925)であろう。なるほどこの小説の後半には、機械と産業と商業がつくり出した生活秩序の中で生命力が萎えていく白人たちを嘲笑する黒人女中たちのかん高い笑い声は何回も響き渡る。主人公の一人である女性 Aline が、何不自由ない裕福な生活を保証してくれる夫 Fred との、女性としては満たされない生活を捨てて、出会いの瞬間から強く心を惹きつける庭師で元小説家の Bruce に近づいて行こうとするときの彼女の逡巡は、客観描写と意識の流れを混合した表現を用いて、つぎのように描かれる。

It is only when you are young that you, being a woman, may be a woman. It is only when you are young that you, being male, can be a poet. Hurry. When you have crossed the line you cannot turn back. Doubts will creep in. You will become moral and stern. Then you must begin thinking of life after death, get for yourself, if you can, a spiritual lover.

Negroes singing —

An' the Lord said...

Hurry, hurry. (p. 248)

The two negro women in the house watched and waited. Often they looked at each other and giggled. The air on the hilltop was filled with laughter—dark laughter.

“Oh, Lord! Oh, Lord! Oh, Lord!” one of them cried to the other. She laughed—a



high-pitched negro laugh. (p. 253)<sup>4</sup>

Anderson は、このように自然な原初的な直感・本能の表象として黒人を描いている。この黒人女たちは、終始かれらの主人と奥方と奥方の愛人という自意識にとらわれた三人の白人が演じる愛の farce を傍観し、それを嘲笑する。彼女たちの発する哄笑の意味は、奥方 Aline とその愛人 Bruce とが、姦通も辞さずに、本能と愛との間にあるはずの命脈を確かめるまでの過程の基音であり倍音のように作用する。しかし、彼らは「登場人物」として、他の者たちと関わることはない。

*Memoirs* (1969) によると、彼には 1906 年前後に、このような黒人女性の笑い声と結びつく生活経験があって、それが *Dark Laughter* のモチーフになったという。その頃は彼はオハイオ州のクリーブランドで、United Factories Company の社長となり、農機具、馬具、ストーブ、卵孵化器、ペンキなどの通信販売に従事していたが、利益追求と誇大な宣伝に専念する生活の欺瞞に疑問を感じ始めていた。彼のそのような悩みが理解できずに、夫の出世と安定した中産階級の生活を求めるように思える妻 Cornelia との関係にも不満を感じ始めていた。その頃すでに創作への関心も動き始めていた。30 歳近くになって、自分の生きるべき新たな道を模索し始めるが、それまでの生き方に根本的な欠陥があることを認めながら、それから脱け出す決断がつかずに悩み続ける。彼はそのため妻をも遠ざけ、友人とも離れて、個室に閉じこもることが多くなる。このような彼の分裂した生活の中で、黒人の女中の笑い声は彼の生活の歪みを直感的に読みとって、それを嘲笑しているように響く。Anderson は、この時の経験が *Dark Laughter* のモチーフになったと語っているのである<sup>5</sup>。

### III

Anderson は作品の中に、しばしば黒人を登場させるが、多くの場合は黒人は自然と調和した牧歌的な生活の表象として描かれて、自然性を失っていく白人の生活の対極に置かれている。黒人は、その意味で常に主人公が語り手の視点から得た印象として提示されるだけで、決して黒人の感動や思考の内容は直接には描かれない。例えば、最初は 1919 年 11 月に *Smart Set* に発表された “I Want to Know Why” の中で、黒人の馬丁 Bildad は、語り手の少年「私」によってつぎのように描かれる。

We got into Saratoga as I said at night and went to the track. Bildad fed us up. He showed us a place to sleep in hay over a shed and promised to keep still. Niggers are all right about things like that. They won't squeal on you. Often a white man you might meet, when you had run away from home like that, might appear to be all right and give you a quarter or a half dollar or something, and then go right and give you away. White men will do that, but not a nigger. You can trust them. They are squarer with kids. I don't know why. (pp. 7-8)

少年が競走馬に対して抱く無心の愛着と賛美、その馬を介して、すぐれた調教師 Jerry との間に通い合う共感、そして、その同じ Jerry が淫売婦にたわむれかかる時に見せた欲情にかられた視線を見たときの失望——これらの経験を通して少年は無垢と猥雑とが同居している Jerry の中に錯雑した大人の世界を垣間見て戸迷う——これがこの物語の主題であるが、Bildad をはじめ黒人たちは、常に少年の直感力によって無垢の世界に組みこまれて描かれている。

1923年5月に完成していた *Horses and Men* 中の傑作 “The Man Who Became a Woman” にも黒人の馬丁が登場する。語り手の「私」は、19歳の頃に、ある競走馬の馬丁をしていた時の、性欲にまつわる経験を回想している。しかし、この物語では、黒人の馬丁について、語り手は黒人に対する共感だけでなく、黒人と白人との間の共通理解のむずかしさとアメリカ社会における人種差別の問題を暗示的に語っている。それは、後でも述べるように Anderson の黒人に関する考え方とそれの描写という点で注意に値する。

語り手の「私」は馬丁をしていた当時、5歳年長の Tom という白人の馬丁と親しくなる。作家を志望しているこの青年は、非常に語り上手で、その話は「私」の想像力をかきたて、心地よい空想をいつまでも抱かせてくれる。「私」はこの青年に強く惹かれ、彼を愛しているとさえ思う。それは一般に想像されるような、いかがわしい関係ではなくて、男性同士のごく素直な感情であったと語り手は回想している。しかし Tom が去ってからは、「私」は女体の夢を見るようになって悩む。Tom のあとに馬丁としてやって来た Burt という黒人と親しくなるが、「私」は Tom に対すると同じような親密感がもてずに、孤独感を深めていく。

I liked him fine and he liked me, but not the same as Tom and me. We got to be friends all right, and I suppose Burt would have done things for me, and maybe me for him, that Tom and me wouldn't have done for each other.

But with a Negro you couldn't be close friends like you can with another white man. There's some reason you can't understand but it's true. There's too much talk about the difference between whites and blacks and you're both shy, and anyway no use trying and I suppose Burt and I both knew it and so I was pretty lonesome. (pp. 194-95)

引用後段の There's some reason...and anyway no use trying. の部分は、語り手が現在時点の感想や判断を自由に挿入するという Anderson 流の語り口で、執筆当時 Anderson 自身が抱いていた黒人観であり、またそれは当時盛んになって来ていた黒人に対する関心の中に見られる軽佻さへの警告であったと思われる。このことは、あとで取りあげる “A Meeting South” (1925) や “The South” (1926) の評価とも関連していて重要な点である。

この作品では、前述の “I Want to Know Why” や *Dark Laughter* の場合のように、黒人は単に本能・直感・自然の活力の表象としては描かれていない。「私」対 Burt という二人の人間関係が問題になっている。だが、語り手は二人の関係を、白人対黒人の関係という問題に話の重点を移していき、黒人の Burt 自体を語ることはしない。従って二人の関係は、白人対黒人の関係という微妙で不可解で困難な問題に概念化されて語られる。

それとは対照的に、語り手は自分の性欲に関する回想を細密に語っていく。前述のように、Tom と別れた「私」は、激しい性欲を感じ、悪夢に悩むようになるが、生来が内向的な性格で、他の白人の馬丁たちのように、気楽に女性に近づくこともできない。孤独になって、自分の理想とする女性の肢体を思い描くが、欲望が満たされない現実とのへだたりは大きくなっていく一方である。「私」は、そんな状態の中で馬の世話に没頭する。彼の受持っている “Pick-it-boy” という競走馬と親しく接しているうちに、彼は「馬と自分の中にある、生命と関係のある何か」 (“something to do with the life in the horse and in me”) 妙な、何ともいい表わし難い感情を覚える。語り手は、その頃から何年も経って、結婚している今の視点に立って回想しながら、それは白人よりも黒人の方がよく理解できると思われる感情だろうと言う。また、それは白人なら、当時の自分のように、少々常軌



を逸した時にのみ感じられるものだともいう。それは今まで白人が獲得し、非常に大切だと思い、大変に誇りとしているものが、実は結局は何ら価値のないものだということを知ることではなかろうかとも述べる。語り手は、いま自分が表現しようとする生命の認識は、白人の世界では、その価値観の転換がなければ知り得ないものなのだろうとも言っているのである。語り手は、その生命に関係する、言い表わし難い感情は、馬にも犬にも小鳥にも内在するもので、人間と共感し得るものだとも述べる。19歳当時の「私」は、そのような生命そのものに対する感情を、競走馬の“Pick-it-boy”と共感し合っているように思う。そして、この馬との間に感じ得た生命の共感のようなものが、男女の関係の中にあってほしいとさえ願い、そのように感じることで性欲の悪夢からも救われるように思う。

このような生命の共感、Andersonの初期の作品から一貫して現われているが、特に *Many Marriages* (1923) と *Dark Laughter* (1925) の中で、男女の愛の在り方を追求するときの Anderson の主張の基調となっている考え方である。また、この考え方は、Anderson の Whitman 解釈にも関係しているところである<sup>6</sup>。

“The Man Who Became a Woman” の中のこの「私」は、ある雨の降る日曜日に、他の馬丁たちが町へ出かけてしまった後、孤独を痛切に感じる。他の馬丁たちのように町へ出て女性に接することもできない彼は、ひたすら美しい女性と一緒にいる自分を空想する。孤独に耐え切れなくなった彼は、一人で酒場に出かける。そこの鏡に写った自分の顔を見ると、それはまるで少女の顔に見える。これは性的欲求と、それを抑圧する現実との齟齬の極限状態からくる悩みであり、さらに語り手も述べているように、長い間の痛切な孤独感と重なってもたらされた心理状態である。これは一種の倒錯の心理といえるであろう。酒場で人間の、肉体的にも心的にも醜怪かつ残酷な姿を見せつけられた悪夢のような出来事に巻き込まれた「私」は、うま屋で Pick-it-boy のからだを、まるで女性のそのように愛撫したあと、屋根裏部屋で馬用の毛布にくるまって素裸で寝る。その夜しばらくして、彼の白肌を見て女性だと思いこんだ二人の黒人馬丁が彼を襲おうとする。激しい恐怖にかられて、二人の黒人から逃げるといふ異常な体験を経たあと、彼はようやくそれまでの倒錯した感情から脱却する。

“The Man Who Became a Woman” の中で、このように語り手は二人の黒人が自分を女性と見誤って襲おうとした状況について述べながら、黒人と性の問題・同性愛の問題・人種差別の問題について言及している点は、この作品のテーマに関連して重要な意味をもっていると思われる。語り手は、上で述べたように、青年時代の性にまつわる経験を、それをとりまく諸要因と関連させて描いている——馬に対して感じる愛情；自分と馬との間に感じられる生命の共感；白人と黒人との間にある決定的な価値観の相異；生命に対する黒人の直感的理解能力と白人の無感覚との対照；黒人に対する信頼感・親密感と同時に人種差別から生じる説明不可能の異和感；そこに生じる孤独感および想像上の女性の姿態と現実では満たされない性欲のフラストレーション。これらの要因は決して単純な因果関係で結びついているのではなく、連環的に、複雑にからみ合っている。その諸要因の連環的な関連を示す叙述は、問題の黒人についての描写中に巧妙に用いられている。

ここで、それらの諸要因の関連が、どのように描かれているかを考察してみる。以下の引用部は、上述の点に関して最も微妙で重要な叙述と思われるところである。便宜上その部分を ①～⑥ の部分に区分して、上の諸要因のかかわり方を見ていくことにする。

What I suppose is that, being upset the way I was, I had forgotten to bolt the door to Pick-it-boy's stall down below and two Negro men had come in there, thinking they

were in their own place, and had climbed up through the hole where I was. They were half lit up but not what you might call dead drunk, and I suppose they were up against something a couple of white swipes who had some money in their pockets wouldn't have been up against. ①

What I mean is that a couple of white swipes, having liquored themselves up and being down there in the town on a bat, if they wanted a woman or a couple of women, would have been able to find them. There is always a few women of that kind can be found around any town I've ever seen or heard of, and of course a bartender would have given them the tip where to go.

But a Negro, up there in that country, where there aren't any, or anyway mighty few Negro women, wouldn't know what to do when he felt that way and would be up against it. ②

It's so always. Burt and several other Negroes I've known pretty well have talked to me about it, lots of times. You take now a young Negro man — not a race track swipe or a tramp or any other lowdown kind of a fellow — but, let us say, one who has been to college, and has behaved himself and tried to be a good man, the best he could, and be clean, as they say. He isn't any better off, is he? If he has made himself some money and wants to go sit in a swell restaurant, or go to hear some good music, or see a good play at the theatre, he gets what we used to call on the tracks, "the messy end of the dung fork," doesn't he? ③

And even in such a low-down place as what people call a "bad house" it's the same way. The white swipes and others can go into a place where they have Negro women fast enough, and they do it too, but you let a Negro swipe try it the other way around and see how he comes out. ④

You see, I can think this whole thing out fairly now, sitting here in my own house and writing, and with my wife Jessie in the kitchen making a pie or something, and I can show just how the two Negro men who came into that loft, where I was asleep, were justified in what they did, and I can preach about how the Negroes are up against it in this country, like a daisy, but I tell you what, I didn't think things out that way that night. ⑤

For, you understand, what they thought, they being half liquored up, and when one of them had jerked the blankets off me, was that I was a woman. One of them carried a lantern but it was smoky and dirty and didn't give out much light. So they must have figured it out — my body being pretty white and slender then, like a young girl's body I suppose — that some white swipe had brought me up there. The kind of girls around a town that will come with a swipe to a race track on a rainy night aren't very fancy



females but you'll find that kind in the towns all right. I've seen many a one in my day.

And so, I figure, these two big buck niggers, being piped that way, just made up their minds they would snatch me away from the white swipe who had brought me out there, and who had left me lying carelessly around.

"Jes' you lie still honey. We ain't gwine hurt you none," one of them said, with a little chuckling laugh that had something in it besides a laugh, too. It was the kind of laugh that gives you the shivers.

The devil of it was I couldn't say anything, not even a word. Why I couldn't yell out and say "What the hell," and just kid them a little and shoo them out of there I don't know, but I couldn't. I tried and tried so that my throat hurt but I didn't say a word. I just lay there staring at them.

It was a mixed-up night. I've never gone through another night like it.

Was I scared? Lord Almighty, I'll tell you what, I was scared. (pp. 217-20) ⑥

語り手は、前述のように孤独な状態から生まれた性的倒錯の経験を語ったあと、このように二人の黒人に襲われかけたいきさつを描く場合、引用部分の①に見られるように、まず、あるひとつの経験をめぐっての黒人の馬丁と白人の馬丁との間にある差異に言及する。②の部分では、それが女性との交渉のことであり、黒人の男たちには、白人の男たちのように簡単に処理できない問題だという状況を述べている。③では、その状況は、単に過去のものではなく、常にそうであること、しかも、その状況は黒人がたとえ大学教育を受けた教養人であっても変ることがないことを語っている。④では、そのような黒人差別の状況は、たとえばいかがわしい場所でも抜きがたいもので、白人の男は黒人の女と交渉は至極簡単だが、黒人が白人の女に対しては同じことをした場合の結果は明らかであると述べている。⑤では、語り手は①から④まで述べた内容は、すでに幸福な結婚をしている「現在」の視点からの黒人についての解釈であることを述べたあと、以下⑥の叙述に移る。⑥は、この長い引用部の①から⑤までの叙述全体に描かれた黒人の生存の状況を背景にして語られる仕掛けになっている。従って、薄明りの中で馬用の毛布にくるまっている肌の白い青年の「私」を女と見誤って襲おうとする二人の黒人の行為には複雑な意味が附加される。性的倒錯を感じるまで孤独に陥った白人青年を女性と思いこんで襲おうとする黒人たちは、実は人種差別の状況の中では自然な情欲の発露も阻害されている。その黒人の発する笑いは、「私」には「身ぶるいを起こさせるような笑い」("the kind of laugh that gives you the shivers")である。白人の「私」は恐怖で声も出ない。ここには *Dark Laughter* に描かれる自然の生命の発露を象徴する甲高い、のびやかな笑いとはまったく対極的な、陰うつで、卑猥な、かすかな黒い笑いと、活力を失って萎えている白人青年の苦痛があるだけである。この語りを通して、読者は黒人の苦痛な状況と「私」のそれとをほとんど等価の激しさをもって理解することができる。もし読者が、各パラグラフのこのような複雑な関連に気づかず読み進めると、語り手の意図はほとんど理解できないであろう。この作品の人物描写は個々の人物の視覚的な特徴を描きこんで、内心の動きを具象的に密着させて提示するという、Anderson が *Winesburg, Ohio* で用いた例の手法ではない。それは、報告調の語り口を用い、各パラグラフの内容を絡み合わせて、主人公の置かれた状況・彼と黒人との関係・黒人たちの苦痛を描出しようとする仕組みである。この描写を通して、Anderson はアメリカ社会における上掲の諸問題の複雑なからまりを提示しているのである<sup>7</sup>。

前段でも述べたように、この作品より以前に書かれた "I Want Know Why" でも、また以後に書



かれた *Dark Laughter* でも、黒人は自然・本能・直感の象徴的意味をもった点景として描かれているだけである。その意味では、“The Man Who Became a Woman”の黒人のとらえ方は対照的である。

#### IV

Anderson がこのような黒人の複雑な生存状況を描いている作品は、ほかにもある。その中で、特に注目すべき作品は二つある。ひとつは 1925 年 4 月に *Dial* 誌に発表された“A Meeting South”である。この作品は、主人公の David が William Faulkner をモデルとしたものであり、Anderson と Faulkner との New Orleans での出会いという、米文学史でも、また Faulkner 個人にとっても重大な事件として、しばしば言及される作品であるが、論じられることは少ない。しかし Anderson は、これを翌年には *Sherwood Anderson's Notebook* に載せ、さらに *Death in the Woods* (1933) にも収めている。この作品に対する彼の愛着のほどがうかがえる。もうひとつは、随筆的な作品“The South”である。これは 1926 年 9 月に *Vanity Fair* に発表され、後に Anderson がヴァージニア州の山間の町マリオンに定住して発行するようになった二つの地方新聞に転載され、さらに、その新聞の記事からの抜粋を編んで構成した *Hello Towns!* (1929) にも組み入れられている。また同じ内容の叙述は *Memoirs* (1969) にもある<sup>8</sup>。

これら二つの作品のうち、Anderson の黒人観形成の過程で重要な意味をもつのは、“The South”である。これは Anderson がシカゴでの都会生活に疑問と嫌悪感を持ちはじめ、定住の地を求めはじめる頃の南部との決定的な出会い以後、数年間にわたって彼が南部に惹かれ続けて、ついに定住することになった小さな町の生活を通して得た、南部の生活と黒人についての感想と考察である。小品ではあるが、その生活の中から新たな生活を求めていくようになる 1920 年代中頃以後の Anderson 評価には重要な意味をもっていると思われる。

“The South”は、Anderson がアラバマ州のモビールとフェアホープに滞在したときの生活を回顧しながら展開するアメリカ文化論風のエッセイである。彼はその中で、南部の風土と人びとの生活、特に黒人たちの生活とそのリズムに強く惹かれた経験を語っている。実は彼がそれほど南部と黒人たちに関心をもつにいたったについては、当時の彼の生活が深く関係していたと思われる。

1920 年の初めまで、彼の生活の根拠地はシカゴであった。特に 1918 年は彼のシカゴでの生活期の最も実り多い年だったといえよう。当時彼は *Winesburg, Ohio* の統一も完了し、出版を待つばかりであったし、彼のすぐれた短編のひとつ、“The Egg”も書かれた。また、彼の創作に多くの刺激を与え、彼のアメリカの歴史や文化観に多くの示唆を与えてくれた *The Seven Arts* の文人たち、Waldo Frank, Van W. Brooks, Paul Rosenfeld らに惹かれてニューヨークへ出かけ、そこで *Poor White* の執筆を始めたのも、この年であった。この晩夏から初秋にかけての短いニューヨーク滞在は、彼が長年にわたって、心ならずも従事していたコピーライターとしての仕事から、一時の解放を楽しんだ時でもあった。しかし、それも所持金が底をついて長続きはせず、結局シカゴでの生活にもどらざるを得なかった。一時はニューヨークで映画の仕事にありつけそうな気配もあったが、それもうまくゆかず、結局生活の為には広告業にもどらざるを得なかったのである<sup>9</sup>。

しかし、まだこの頃の Anderson にとっては、シカゴは第二の故郷といえる場所であった。1919 年に、日付なしで“On train in Kentucky, Wednesday”と記した Brooks 宛の手紙は、仕事上の旅先で書いたものと思われるが、その中で Anderson は *The Education of Henry Adams* を読んだこと、そして、それがアメリカ文学の中で重要な意味をもっていると述べている。そしてニューイングランドは、それ自身として完結してしまった文化圏であるのに対して、中西部は、まだ完全に根



こそぎ疲弊してはいないと述べ、Mark Twain はニューイングランド文化に毒されたと批判して、Brooks の *The Ordeal of Mark Twain* には、ニューイングランドが Twain に与えた弊害を述べる一章を加えるべきだと助言している。そして最後に、*Winesburg, Ohio* と *Poor White* の仕事の進捗状況を述べたあと、Anderson はいかに中西部が自分の生活と密接に結びついているかを示す言葉で結んでいる。

I came West with my new book *Poor White* about laid by—as we out here say of the corn crop in early October. It is in shocks and stood up in the field. The husking is yet to do. I will not attempt it for a time as the proof on *Winesburg* should be along most any time. . . .

I am back at the old place in the advertising office. The moving picture dependence became impossible. That isn't my road out.

Back here I almost feel able to say that I don't care if I never travel again. The place between mountain and mountain I call Mid-America is my land. Good or bad it's all I'll ever have.<sup>10</sup>

しかしこの年の12月には、Anderson は、生活の為にどったコピーライターとしての仕事にまたげられて、創作が思うにまかせなくなっていることを嘆いた手紙を Brooks に送っている。それに加えて、二番目の妻 Tennessee Mitchel との間で交した、お互いの自由を侵さないという約束で出婚した結婚にも、きしみを感じ始め、Anderson は家庭に対する憧れのような気持を抱くようになっていた<sup>11</sup>。

また、この頃シカゴの文学サークルも分散し始め、彼が作品を発表する場と見なしていた *The Little Review* 誌は芸術的な質を下落させ始めているように Anderson には思えたし、彼がもっともその発展を期待と尊敬を払っていた *The Seven Arts* 誌も第一次大戦へのアメリカの参戦をめぐる編集者たちの意見が分れ、また参戦に反対する編集者たちは出資者から反感を買ったために廃刊されてしまっていた。彼はこの当時非常に強い孤独感に陥っていた。それに加えて、*Winesburg, Ohio* の反響を、彼が期待したほどかんばしくなかったため、創作意欲も沈滞していた。こんな状態の中で、彼はシカゴの生活から離れたたいという強い衝動を感じていた<sup>12</sup>。この衝動は、1913年にイリヤからシカゴへ出て来た時ほどの劇的な転身とまではいかなくとも、その後の Anderson の生活と作品に大きな影響を及ぼすことになる。

1920年1月に、ひどい流行性感冒に苦しんだあと、彼は2月になると妻と仕事をシカゴに残し、保養もかねて、アラバマ州に赴き、そして Anderson はモビールとフェアホープに晩春まで滞在する。この期間に Anderson は南部の自然と生活のリズムに刺激されて、それまで中断していた *Poor White* を書きあげ、また絵画も描いている<sup>13</sup>。

“The South” では、Anderson は南部が自分をひきつける要素をいくつかあげる中で、特に黒人について多く語っている。彼は黒人の生活が自然に近いリズムをもっていると感じて、その魅力を賛美するばかりでなく、人種差別、混血、白人と黒人との現実生活のすみずみまで存在する両者の葛藤などについて考察したことを述べている。先ずはじめの部分では、彼が南部にひかれたいきざつを次のように述べている。

Liking negroes——wanting them about——not wanting them too close. In me the

southern contradiction so puzzling to the north.

To a man like myself—that is to say to the artist type of man living in America—there is something tremendously provocative in the American south, in all the life of the south. The south is to me not just a place—it is an idea—a background.

Laughter perhaps—leisure—a kind of warm joy in living.

Born in the middle west—a youth spent as a wanderer and factory hand—after years of struggle, trying to be a successful man of affairs in industrial northern cities—I went south for the first time when I was well into middle life.

Something had drawn me south—something I had felt since boyhood. It may have been the reading of Huckleberry Finn—or the talk of my father. (*Hello Towns!* p. 55)

この部分は、南部行とその後の南部での生活が、いかに彼の芸術上の視野に影響を与えたかを語っている。一方においては黒人に対して常に観察者としての距離を保ちながら、他方においては南部は、アメリカに住む芸術家にとっては、何か非常に刺激的なものであり、いわば、単なる場所としての何かではなく、それは“idea”であり、背景であると述べている点、そして、それがまた黒人と分かちがたく結びついているとしている点は注目される。ここで“idea”といているのは、ある対象から得た印象または image に近い意味であろう。特に注目されるのは、南部は芸術家にとってアメリカの背景 (background) だと述べていることである。

この記事より約 10 年前に書かれた *Winesburg, Ohio* の最終部では、主人公 George Willard は、19 歳の春、それまでその町で得たすべての経験を抱いて、より豊かな経験を求めて、19 世紀末の機械文明によって急激な変化を強いられている中西部の町から旅立つ。汽車の窓からワインズバーグの景色は視界から消え、そこでの生活は、彼が大人になって描く人生の夢の背景として残る。George は Anderson 自身の投影であり、確かに Anderson はオハイオ州クライドの町を背景にして作品を書き続けた。そして彼の作家としての仕事場は中西部の大都会シカゴであった。少なくとも 1920 年の 2 月、アラバマ州のモビールに行くまではそのとおりであったことは前段で述べた。だがそのモビール行は、それまでの「生活の背景」に新しい展開を促した。その時、彼は 45 歳に近くなっていた。(I went south for the first time when I was well into middle life.) 彼の生活に新たな展開を促した要因は何であったのか。Anderson はモビール行で初めて接した南部の印象を次のように描く。

Niggers.

Shiftlessness.

I got it all that first time south and landed at last in the old city of Mobile. This was in the month of February....At once I felt—how shall I explain? There was something friendly—in dark figures passing in dark streets, in buildings. Something friendly seemed to come up out of the warm earth under my feet.

In northern industrial towns at night, as you wander thus through streets of small houses, there is always something tense and harsh in voices coming out of houses. Something nervous—irritable—in people.

Life is too difficult. Everything moves too fast.

The tenseness was in my own voice, that first night in the south. I had gone south



hoping to get it out.

Softness in voices, laughter, an easy careless swing to bodies of men and women. I walked in a soft cloud of words, not clearly caught, feeling warmth in sounds, in people.

There was a negro ballad I had once heard Carl Sandburg sing, a ballad about the boll weevil.

*"I like this place,  
This'll be my home."*

I went murmuring the song—not being a bold singer—have been murmuring it to myself these last four or five years—while I lingered in the south. (p. 56)

Anderson が最初の南部との出会いでひきつけられたのは、北部の工業地域に生活する人たちがとっている何か神経質な、いら立たしいもの、すべてがあまりに速く動いていくような生活と対照的な南部の黒人と、一種のものうさ、大地から伝わる何か温かいもの、人々の気楽でこだわりのない身体の動きと笑い声や言葉の温かい響きであった。Anderson は、このような印象を与える南部に生活の根拠地—home—を見出したのである。この頃、つまり 1920 年頃から、彼は生活と生活の場との関連を深く考えるようになっていったと思われる。上の引用中の Carl Sandburg がかつて歌っていた黒人歌謡の一節と、それをここ数年口誦んで、南部をさ迷ってきたと述べているくだりは、彼が生活の新たな転回を図っていたことを語っている。それまでの Anderson は、妻子との安楽な生活を捨ててシカゴへいたり、文学への転身を果たし、創作に専念する生活を送ってきた。しかし、彼はこの頃から、生活の場を定めて、その周囲の自然と人間関係、地域社会との交渉の中で、生きることに創作活動との統一を求める方向に向い始めたのである。さらに 1921 年の初めてのヨーロッパ行と、その時、特にフランス滞在中に感じた文化の歴史と伝統に対する尊敬の念は、彼を New Orleans にひきつけていき、1922 年 1 月から 5 月までのそこの生活は、やがて、彼に南部へ定住することを決意させることになる<sup>14</sup>。

## V

そうした Anderson の心の動きを、“New Orleans, the Double Dealer and the Modern Movement in America” (*The Double Dealer*, March, 1922) という彼のエッセイがはっきり語っている。そこで彼は *Double Dealer* が果たすべき文化的、芸術的な分野での使命を述べつつ、アメリカ文化・芸術のとるべき方向について語っている。彼はアメリカの文化が、“speeding up and the standardization” に圧倒されていく事を憂え、その代表的な大都会であるシカゴやピッツバーグには、文化を育てるのに不可欠の想像力を侵害する現実の事象 (facts) が支配的であると嘆じる。そして、シカゴの半分の広さで単一の民族が住むパリには、約 30 種もの日刊新聞が発行されているのに対し、多民族の集まるシカゴでは、英語による二種の朝刊紙しかない事例をあげて、フランス国民の個性の尊重を賞賛する。Anderson は、そうした個性尊重の文化を護る立場に立って、シカゴのような大都会の「加速と規格化」の文化からの方向転換が、アメリカ文化には必須であると主張する。彼は *Double Dealer* にその使命を託し、個性尊重を求める “Modern Spirit” の一要素として、南部文化の独自の主張を表現する機能を果たしてほしいと強く望んでいる。このエッセイの基調には、1921 年のヨーロッパ行で得たフランス体験が強く影響していることが読みとれる。彼のこのヨーロッパ体験を記した “Notebook” の中には特にフランスの歴史と文化の伝統を象徴するルーブル美術館、ノートルダムやシャルトル大寺院を目のあたりにしての感動が生き生きと描かれてい

る。彼はその歴史と文化の伝統が、庶民の生活の中に根をおろしているという印象を強くもった。そして、人間が生まれて生き続ける過程で、その空間的、時間的場としての土地、文化、歴史のもつ意味を彼は改めて問うている。Anderson は、シカゴに出て来て以来、文化と歴史の問題については、*The Seven Arts* の Brooks や Frank に刺激されて、関心を深めていたが、このフランス体験は、彼のその関心をさらに深めたといえる。いまここで特に注意をひくのは、日記風に書かれた “Notebook” の中で、上述のようにフランス文化に照応させて、アメリカ文化の物質的豊かさを中心とする考え方から生じる人間差別、人種差別の意識の強さ、特に後者の問題について、何回も述べている点である。さらに、ロンドンで、ある黒人女性とまったく偶然に出会った経験を語り、さらにそれに関連させて、前述の “The South” で述べた南部と黒人から得た強い印象を、かなり詳しく記している。そこではまた、この強烈な印象のもつ意味を、彼はその時点から問い始めたという意味のことを書いている<sup>15</sup>。つまり彼は、1920 年の初めに、アメリカ南部と黒人について、意識的に考え始めていた。そして、この問題について、彼の発言や作品を、いままで見てきたようにたどっていくと、大略つぎのような経過になる。すなわち、彼は 1920 年前後にシカゴの生活、都会生活から離れて、新しい定住の場を求め始めた。その欲求は、南部と黒人と生活との出会いによって、ますます強まっていった。それから一年余り後のヨーロッパ旅行の間に、特にフランスで得た見聞に刺激されて、彼は人間の生活と文化および歴史との関連について考察を深めていった。そして数年後に書かれた “The South” は、その問題についての、それまでの彼の生活と考察から得られた、その問題に対するひとつの集約としての意味をもつこととなった。

“The South” の中で、前述した引用文に続いて、Anderson は、黒人の生活から生み出される芸術・文化が、アメリカ文化・芸術の総体および、生活の在り方と、どのように重大な関係があるかを述べている。彼は、そのことを語るときには、アメリカの文化・社会・生活・歴史全般にわたって無視することのできない人種差別・混血・黒人対白人の対立とその根深さなど、いくつもの要因が複雑にからまり合っていることを強く認識していた。そして彼は、その困難な状況の真実を描き出すことができるのは、南部に生まれ、そこに生き続けてきた白人および黒人の中から現れ出て、南部の複雑な現実と直面して、それを表現できる真の芸術家以外にはないと述べている。そのような観点から、Anderson は、すべてを正邪で割り切ろうとするピューリタンの論理や、北部人の傍観者的な立場から黒人に対して示す同情的な感傷は、錯雑たる南部の問題には通用しないと主張している。この主張の中には、はじめに触れた Carl Van Vechten の *Nigger Heaven* に代表されるような、北部の作家たちによる黒人に対する熱狂的関心や、あるいは黒人を描いた多くの作品に見られる当時の紋切り型の描写に対する Anderson の批判がこめられていたと思われる。このように Anderson の黒人と南部についての関心は、最初はやはり感傷に近い印象に刺激されたのだが、南部に生活の中心を移しながら、そこで直面すべき複雑な諸問題のむずかしさ、根深さを知り、それに対決すべき態度を次第に強めていったといえよう。

Having lived in the south I believe southern white men handle it as well as northern men ever could—perhaps better.

Chicago, talking of southern violence. (p. 59)

The negro contributing—doing too much of the contributing now. A second-rate negro poet or artist always getting twice the credit of an equally able white man. That's northern sentimentality.



It is a difficult, delicate job to see the southern white man's angle and see it whole, but the northern man will have to do it if he wants to draw nearer the south.

To go black—think all the hope of future cultural development in the south is in the southern black, because he sings, dances, produces jazz—is hopelessness.

The puzzle remains—two races that when they meet to produce blood mixture must meet in secret, in shame.

The southern problem is the most difficult problem in America. The attitude of the north has never helped much. (p. 61)

It was the south—all I know of the south. If you of the north lived there do you think you would do the job better?

Southern civilization began with a problem—a war was fought—the problem remains.

It cannot be solved now—in any way I know.

It can be faced.

Facing it may be the one thing needed for the flowering of a truly southern art, a truly southern contribution to an American civilization. (p. 65)

Anderson のこのような南部—黒人観は、先に言及した彼の黒人描写に強く影響している。特に “The Man Who Became a Woman” におけるような複雑な陰影を含んだ黒人描写は、“The South” に見られる認識の経過と密接に関連していると言えよう。彼があのように一貫して黒人の内心を直截に語らなかったのは、このように南部と黒人に関する問題について、また作家としての自分のアプローチの仕方について、彼なりの、かなり明確な見解があったが故と思われる。また、本稿では扱う余裕はないが、彼の後期の諸作品には、やはり彼の南部と黒人に見られる思索と生活経験が色濃く投影している。

## VI

前節で述べたような Anderson の南部と黒人についての考察が短篇の形ではっきり描かれているもうひとつの作品は、前にも触れたように “A Meeting South” である。この作品は周知のように、彼と Faulkner との出会いがモチーフになっていて、語り手の「私」が描いている David という人物は Faulkner がモデルであるといわれている。これは、初め *Dial* 誌の 1925 年 4 月号に掲載され、後に *Sherwood Anderson's Notebook* (1926)、さらに *Death in the Woods and Other Stories* (1933) の中に組みこまれている。

*Death in the Woods* は生と死とを循環する生命の本質、それを認識する人間の認識過程、その人間と家族およびコミュニティとの関連、人間の自然性の意味の考察などをテーマにしたタイトルストーリーと、同じテーマを子供の世界に移して描いた最終の物語 “Brother Death” との間に、これらのテーマの変奏といえる 14 の物語を配列した作品集である<sup>16</sup>。それらは主として 1925 年から 1930 年頃にかけて書かれた作品である。タイトルストーリーの次に置かれた “The Return” から “In A Strange Town” にいたる前半部は、妻に死なれ、故郷を喪失した中年男の寂寥；妻に対する不信に陥った若い夫が演じる悲喜劇 (“There She Is—She Is Taking Her Bath”)；幼ない頃から互いに憎しみを心中に秘かに増幅させてきた初老の男同士の格闘 (“The Fight”)；人間に内在する

美しさが、日常の所作の中に一瞬現れて消える瞬間を認識する要因、すなわち、場と時間と観察者の心的状況 (“Like A Queen”); 家庭の安楽の中で暮すうちに鈍らされる感覚、認識力に活力を注入するために、一人で見知らぬ町へと旅に出て、生と死についての想念を新たに深めては、また家庭へと帰還する生活の行程を語る「私」 (“In A Strange Town”) などによって構成されている。これらの物語の背景は、主として New York あるいは Chicago のような都会か、それに類似した場所である。例えば、小説を創作する過程での想像の世界と現実の世界との対置と微妙な関わり方を描いた “The Lost Novel” の背景はロンドンである。また、アメリカの成り上り者夫婦の浅薄な生活を描いた “The Sophistication” の背景はパリである。

これらの前半の物語群に対し、“These Mountaineers” 以下の物語の背景は、主として南部の山間部である。ひとつの例外は、“A Meeting South” の背景で、それは南部の古都ニューオーリンズである。そして後半部には前半で描かれたテーマと密接な関連をもった物語がいくつも配置されている。“These Mountaineers” では、ヴァージニア州南西部の山奥に住む人間に初めて接した「私」は、そこに生活する人間の実態に強い好奇心を抱きながら、どうしても理解し切れないもどかしさを描いている。“A Sentimental Journey” では、山間部に住む 40 歳の男が、幼い長男を連れて、短期間の現金収入を求めて 80 マイル離れた鉾山町に出稼ぎに出かけはしたが、家庭を慕う気持が強く、鉾山町の生活になじめずに、深い雪の中を命がけで家庭に帰り着く。禁酒令の影響で、“moon” つくりによって現金収入が山間の町を変え始めていた頃の物語である。この物語りは、主人公と home との関係をめぐる、前半の “The Return” と対置している。“A Jury Case” の背景も南西部の山間地である。“moon whisky” の蒸留器の所有——山間地を侵し始めた利欲——をめぐる人間関係の崩壊、裏切り、正義を守る苦しみ、暴力、殺人などの人間の行為の諸相を通して、生と死の意味が問われている。これは背景も、素材も、テーマも Faulkner の “The Fire and the Hearth” に共通するところが多い物語である。“Another Wife” の背景も山間部である。この物語は、妻を亡くした中年の町医者が、山間の村に一時滞在したときのエピソードである。彼は一時の自由な生活の中で裕福な若い女性に恋をするが、それにおぼれ切ることもなく、またその魅力から遠ざかるでもない。一歩離れた位置から自分と相手との関係を見守って、それを楽しんでいる彼の感情が描かれる。このように、後半では南部の山間地が背景に置かれ、そこに住む人間の生活の諸相が描かれている。

以上のような物語集の中で、“A Meeting South” は 1925 年頃のニューオーリンズのフレンチクォーターを背景にして、アメリカ南部の白人対黒人の関係、南部の没落していく農園に生まれ、第一次大戦でひどく負傷した青年詩人の苦痛、そしてそれを癒す力の在処がテーマになっている。語り手である「私」が偶然にニューオーリンズで出会った青年詩人 David は、アラバマ州の没落していく農園主の息子である。彼は第一次大戦に、軽い気持で英国空軍に志願し、墜落事故でひどい傷を負う。野戦病院の不十分な治療とそこの惨状に耐えられず帰還してしまうが、その後、足と頬の傷がひどく痛む。少しびっこをひき、顔をときどきゆがめ、その痛みを癒やすために、青年はズボンのポケットに隠し持ったウィスキーびんを取り出しては飲む。外傷以上の苦痛をこの青年に読みとった「私」は、青年を Sally という老女性の家に連れていく。Sally は中西部出身で 65 歳になる。何年も前にニューオーリンズに来て、スペイン風の古い家を買ひ、賭博場と男女の逸楽の宿としての場を提供したり、親身になって無頼の男たちの面倒を見たりして金をためる。そして 10 年ほど前、自分が予定していた程度の金をためると、ふっとり仕事を止めて、今は美しく昔の姿のままに整えられた邸で悠々と生活している。南部の古い港市で、人生の裏を見続けて生きて来た中西部出身の Sally は、母性的な愛情に溢れた老女性になっている。「私」は青年詩人 David の苦しみを、Sally ならば、たとえ一時でも和らげてくれると確信して、二人をひき合わせる。期待どおり、Sally は David



をやさしくもてなす。David は彼の苦痛について彼女に話す。傷の痛みで夜なかなか寝つけないときに、彼は外へ出て、父の農園で働く黒人たちの姿を、こっそりと眺めるという。夜の労働を好む黒人たちは、彼らだけになって喜々として歌いながら働く。若い黒人の男女が交合を楽しむ。David は、黒人がつくったウィスキーを飲みながら、黒人たちの歌うのを聞きつつ、地面に横になって寝入る。いまは、David は、眠れない苦痛の夜には、そうして戸外で休息するようになっている。David は、そう話した後、Sally の家のパテオに繁るバナナの葉蔭で、煉瓦敷きの床の上に横になり、やがて眠入る。

David の苦痛には二重の意味が含まれている。ひとつは南部の農園という生活の機構が崩れていく中で、彼を感じる根無しの生存状況の不安から生じる心的な苦痛である。もうひとつは、戦争という人間破壊の暴力が彼に加えた肉体的心的苦痛である。その苦痛を癒やす力を、彼は黒人の生活の中に感じとっている。白人の存在を意識することなく、夜間に焚き火を囲んで気ままに労働する黒人、そしてその歌声は、彼の苦痛を和らげ、しばしの眠りを誘う。もうひとつ彼の苦痛を和らげてくれたのは、Sally の母性愛的ないたわりとやさしさである。それは、Sally が長い間ニューオリンズに生活して、南部の人々と生活状況に馴染んで育んできた、いわばその土地と人間についての深い理解から発するやさしさと、いたわりである。Sally が David に会った瞬間に、彼の苦痛を直感できたことは、Sally の本質をよく語っている。それに対して、物語の前半で語り手の「私」は、多くの北部人たちが、かりそめに南部を訪れては、手軽に南部と黒人について物語をものごとくすることについて非難している。David と Sally、および二人の関係は、南部と黒人についての理解をめぐる、このような北部人たちと対置されている。また Sally の存在は、南部以外の、中西部出身である人間が、南部を理解する可能性と、それを支える条件を示しているのである。さらに、「私」は Shelley のような詩を書きたいと願っている南部出身の若き詩人 David が、その苦痛を超えて、真の南部と黒人とを描くことを期待しているともいえる。

“I give them [the Northern people] what they want,” he [the Northern writer] said…  
“About what now, do you fancy?” he asked innocently.

However, I am not thinking of the Southern writer of Negro stories. I am thinking of the Southern poet, with the bottle clasped firmly in his hands, sitting in the darkness beside me on the docks facing the Mississippi. (p. 226)

“The South” に関しても述べたとおり、当時 Anderson 自身、南部の複雑な状況を描くには、白人、黒人を問わず、南部の土地と生活に根ざした芸術家が必要であると信じていた。“A Meeting South” は、まさにその主張をテーマにした小品であり、また *Death in the Woods* 全体の中では、南部を背景にした人間生活の諸相のひとつとして組みこまれている作品である。

“A Meeting South” は、前述のように Anderson が 1924 年に Faulkner と初めて出会ったときの印象がモチーフとなった作品で、David のモデルは、当時の Faulkner であることは、すでに何回も語り尽くされたエピソードである。両者の交友と互いに抱き合った評価については、それぞれのエッセイ・書簡・回想などが常に深い興味をそそるところである。その中でいま特に述べておきたいのは、Anderson の抱いた南部と黒人についての関心と、彼がその才能を適確に見抜いて Faulkner に託した期待との関係である。

1925 年 1 月から 5・6 箇月間、Anderson はニューオリンズで Faulkner と交友を深め、作家としての絶頂期にある自信と余裕をもってこの後輩に多くの助言をした。なかでも、Faulkner が当時の

回想として記す次の Anderson の彼への助言は両者にとって重要な意味をもっている。

“You are a country boy,”…“all you know is that little patch of up there in Mississippi where you started from. But that’s all right too. It’s America too ; pull it out, as little and unknown as it is, and the whole thing will collapse, like when you prize a brick out of a wall.”<sup>17</sup>

Faulkner は、まさに「自分が生れ出たミシシッピ州のささやかな土地」と、そこに住む人間の高貴、下劣、慈愛、残酷、知性、欲情、希望、失意、過去、現在、偏見、差別、などの諸相と、それらの複雑きわまりないからみ合いを深い洞察力と独特・斬新な表現技法によって表現し、壮大なヨクナバトゥファの世界を構築した。彼は Anderson の「君が生れ出たそのちっぽけな土地もまたアメリカなのだ。そこがちっぽけで知られていないからといって、その部分を引き抜いてしまえば、全体は減茶減茶になって、壁の煉瓦をひとつ無理矢理に引きはがしたようになってしまう」という発言の意図を見事に果したのである。“A Meeting South” の Sally は、古いスペイン風の邸を買い、それを何年もかけて修復していった。それは、中西部出身の彼女が、南部に生活を根づかせ、南部を理解していく過程でもあった。David は、その Sally の邸に迎え入れられて、煉瓦を敷きつめたパテオの上で、心身の痛みを癒やした。David に対する Sally の理解とやさしさには、Anderson が若き Faulkner にかけた期待——南部に生まれ育ち、南部を理解し、南部を描ける芸術家たること——がこの絵画的構図の中に重ねられている。

## VII

Anderson は、いままで述べてきたように、1920 年代の初めから、南部と黒人に強い関心を抱き続けた。その関心は、定住の地を見出して、自然と人間と文化との関わりを確かめようとする彼の後半生の関心と強く結びついていった。彼は南部に生活することによって、北部の機械文化が進んでいく方向の転換を、個人としての南部での生活体験を通して確かめようとした。「速度と標準化」が浸蝕し続けていく人間の自然性および自然に根ざした生活と文化の生命を守ることと、南部と黒人について真実を語ろうとすることとは、Anderson にとっては同じ意味をもつようになった。しかし、南部に生活し、南部と黒人に接すれば接するほど、彼にはますますはっきりと南部の土地、白人と黒人の対立、経済的・人種的な差別、白人と黒人の屈折した心理の葛藤などが見えてきた。そして、アメリカの姿を描くには、南部のこれらの諸相を赤裸々に描くことが欠かせないと思い始めた。そのような観点に立つと、当時急速に高まってきた黒人とその文化・芸術に対する関心には、多分に軽佻さが目立つように彼には思えてきた。彼は、南部と黒人の姿を描き出し得るのは、南部自体が生み出す真の芸術家以外にはないと信じるようになった。彼はその立場から、北部文人たちの南部に寄せる感傷主義を厳しく批判し、他方、彼のような南部外の人間が本当に南部と黒人とを理解し、それを描く可能性を探った。そのような彼の模索は、後期の生活と作品のテーマに強く投影されることになる。ここで取り上げた諸作品は彼の考察の過程を反映しているといえよう。また、ここでは取りあげなかったが、彼の後期の諸作品評価には、上述のような生活と思索の過程が、ひとつの重要な相として考察されるべきであろう。

最後に触れておきたいことは、Anderson の作品評価にあたって、彼の生活と作品との関連は、どうしても抜きにしては考えられないということである。それは彼の創作姿勢、表現技巧に関する基本的な考え方から生まれた作品を扱う場合には必然的に要求される方法といえよう。南部と黒人に



について思索をめぐらしていた頃、彼は *Sherwood Anderson's Notebook* (1926) に載せた “A Note on Realism” の中で、現実生活と芸術を生み出す想像の世界とを画然と区別し、現実生活は混沌かつ錯雑として目的性がないのに対して、芸術家の想像の世界には目的があり、その主題に対して誠実かつリアルたるべき形式を与えようとする決意があると述べて、伝統的な創作論を明快に展開している。しかしまた、次のように述べて、現実生活と想像力との関連の重要性をも主張する。

Separate yourself too much from life and you may at moments be a lyrical poet, but you are not an artist. Something within dries up, starves for the want of food. Upon the fact in nature the imagination must constantly feed in order that the imaginative life remain significant. (p. 73)

結局 Anderson は、現実生活と想像の世界を截然と分離することはできなかった。二つの世界を往来しつつ創作することは彼の信念でもあったといえよう。彼のよき理解者であり、彼が畏敬もした Gertrude Stein が、彼の作品を評して、彼は他の同世代の作家たちと同様に、19 世紀の影響から脱却できなかったと述べたのも、上述のような彼の創作態度を指していたのであろう。彼の創作態度については、筆者はかつて取り上げたこともある<sup>18</sup> が、その問題と本稿で考察した彼の生活の軌跡およびここで論及した諸作品との関連は、また別に考察しなくてはならない問題であろう。本稿のこれまで述べてきたことから言えることは、Anderson が南部と黒人の問題をめぐって描いた実生活と創作活動の軌跡は、まさに彼の文学観からすれば、当然の道筋であったということである。

#### [注]

1. Cf. Chidi I Konné, *From DuBois to Van Vechten: The Early New Negro Literature, 1903-1926* (Westport, Connecticut: Greenwood Press, 1981), pp. 3-8. Frederick J. Hoffman, *The Twenties: American Writing in the Postwar Decade* (New York: The Viking Press), pp. 269-72.
2. Darrel W. McNeely, “Jean Toomer’s *Cane* and Sherwood Anderson’s *Winesburg, Ohio*: A Black Reaction to the Literary Conventions of the Twenties” (Dissertation, University of Nebraska 1974) および Ikonné, *op. cit.*, pp. 140-43.
3. Glen A. Love, “Sherwood Anderson: Stilling the Machine,” in *New Americans: The Westerner and the Modern Experience* (East Brunswick, New Jersey: Associated University Presses), pp. 170-218.
4. 以下 Anderson の作品からの引用は、大橋吉之輔編 *The Complete Works of Sherwood Anderson* (臨川書店 1982) からである。
5. Ray Lewis White, ed., *Sherwood Anderson’s Memoirs: A Critical Edition* (Chapel Hill: University of North Carolina Press), pp. 248-53. (以下 *Memoirs* と書く)
6. 拙稿「*Dark Laughter* 論—主題と手法—」(東京教育大学文学部紀要『西洋文学研究』昭和 51 年 3 月), “Sherwood Anderson’s View of Walt Whitman” (大妻女子大学文学部紀要 第 12 号 1980 年 3 月), 「Sherwood Anderson 再考の一視点—“Death in the Woods” の評価をめぐって—」(大妻女子大学文学部紀要, 第 14 号, 1982 年 3 月) などで Anderson の生命感, 自然観を論じたので, ここでは言及するにとどめる。
7. *Winesburg, Ohio* における人物描写については, 拙稿「シャーウッド・アンドソンの技巧—成就と限界—」, 徳永暢三編『英米文学の新視点』(昭和 51 年英潮社) で考察した。
8. *Memoirs*, *loc. cit.*
9. Cf. James Schevill, “The Necessity of Friends,” *Sherwood Anderson: His Life and Work*, pp. 109-130.
10. *Story, September-October 1941: Homage to Sherwood Anderson* (New York: Harcourt, Brace), p.

51.

11. Schevill, *loc. cit.*
12. *Loc. cit.*
13. *Loc. cit.*
14. Anderson の Paris 滞在とその影響については, Michael Fanning, *France and Sherwood Anderson : Paris Notebook, 1921* (Baton Rouge : Louisiana State University Press, 1976) 参照.
15. *ibid.*, pp. 59-61.
16. 特に, このタイトル・ストーリーについて, 筆者は大妻女子大学文学部紀要, 第 14 号(1981)で考察した。また Anderson の南部への関心と *Death in the Woods* に関連しては, 『英語教育』(1983 年 3 月号)誌上の「Sherwood Anderson の評価と *Deeth in the Woods*」と題する小文でも言及した。
17. Joseph Blotner, *Faulkner : A Biography*, (New York : Random House, 1974), p. 415.
18. "A Transatlantic Interview—1946" in *Gertrude Stein : A Primer for the Gradual Understanding of Gertrude Stein*, edited by Robert Bartlett Haas (Los Angeles : Black Sparrow Press, 1973), pp. 15-20. この Stein の発言については, 拙稿「シャーウッド・アンダソンの技巧」(前出)においても論及した。



Sherwood Anderson's Black People and the South : Another Aspect of the Criticism on  
"The Man Who Became a Woman," "The South" and "A Meeting South"

Yuji Kobayashi

SYNOPSIS

Much reference has been made to Sherwood Anderson's deep interest in black people and the South in terms of his faith in primitiveness. This aspect, however, has never been fully discussed, though his primitiveness has frequently been referred to in connection with his ambivalent revolts against "the speed and standardization" of modern times.

It is sometimes said that he resisted vigorously the destructive power of industrial mechanization, or that he sought positively after a habitat where man could live in harmonious coexistence with the overwhelming power of mechanization. At other times he is said to have had a tendency towards escapism, that is, an inclination to nestle in the world of imagination. The balance of criticism on Anderson has been swaying between the two extremes of positive ness and of escapism.

The fact, however, is that he was steadily seeking after a place, or "home," where he could ensure an existence supported by the recognition of the interrelationship of man, nature, and culture. Anderson's keen interest in blacks and the South was one of the aspects in the process through which Anderson came to find the "home" he was searching for in Virginia in the middle of the 1920's.

The aim of this paper is to ascertain how Anderson became interested in black people and the South, and how he synthesized his experiences and observations there in building up his "home".

Firstly, the paper discusses how Anderson portrayed the blacks in "The Man Who Became a Woman," which distinctly shows his peculiar approach to blacks, whom he regarded as representing primitivism. Secondly, "The South" is taken up, in which Anderson presented his perceptive and complex view of the relation between blacks and whites, the characteristics of Southern culture, and the importance of being a real Southern artist who could express "all phases of Southern life" so as to solve "the difficult problems of the South," the problems of American culture as a whole. Thirdly, "A Meeting South" is treated in order to confirm how Anderson expressed those factors mentioned above in the form of fiction. In this story Anderson earnestly looked forward to the emergence of the real Southern artist as personified in David, who is said to have been modeled after William Faulkner.